

第3回野菜需給・価格情報委員会消費分科会の概要

1 日時

平成23年10月26日(水) 14:00～16:00

2 場所

独立行政法人農畜産業振興機構 南館1階会議室

3 概要

(1) 特にお聞きしたい論点(資料1)の説明

資料1により説明。

(2) 最近の野菜の需給・価格動向について(資料2)の説明

・キャベツは、この時期の主産地は群馬・岩手県産。価格は、両県産ともに7月前半は高めに推移、8月上旬から中旬にかけて低下、9月中旬から10月上旬にかけて高めに推移し、現在では平年を下回る。

・たまねぎは、8月を境に西日本(兵庫・佐賀県産)から北海道産に産地が切り替わり。8月いっぱいまでは安定した価格で推移したが、9月中旬以降は、北海道の天候不順の影響もあり価格が高めに推移し現在に至る。

・だいこんは、7月から10月までは北海道産、青森県産が主体になる。価格は、8月に入り平年価格を下回る時期もあったが、その後上昇に転じ、10月上旬は高値となった。千葉県産が出始めた10月中旬以降、落ち着き、平年並みになっている。

・にんじんは、7月を境に産地が切り替わる。7月の千葉県産の価格は平年よりも低めに推移。後続の北海道産は8月下旬以降平年並みとなり、10月上旬に若干高めの時期があったものの、現在は平年並みに落ち着いている。

・はくさいは、この時期、ほとんどが長野県産。価格は、8月いっぱい平年価格を下回る状況が続いたが、9月に入り価格は上昇に転じた。10月上旬はかなり高めに推移したが、その後、下落し、現在は平年並みになっている。

・レタスは、長野県産が10月まで続き、10月からは茨城県産に産地が移る。価格は、8月上旬までは平年並みで推移したが、8月中旬以降上昇に転じ、9月上旬はかなりの高値になった。その後、茨城県産の出荷とともに、落ち着き、現在は平年並みになっている。

(3) 野菜の消費関連資料(資料3)の説明

・1人当たりの購入数量は、猛暑の影響で野菜価格が高水準で推移した昨年9月以降は前年を下回って推移したが、価格が落ち着きを見せ始めた12月以降は前年並みに回復した。はくさいは、夏に向けて消費の落ち込みが顕著となっている。

・1人当たりの購入金額は、全体では、10月から3月までは前年を上回って推移し、4月から6月までは春野菜が高騰した前年を大幅に下回り推移した。7月に一

且前年を上回ったが、8月は野菜価格の低迷により前年を下回った。

- ・1人当たりの品目別年間購入数量は、全年齢平均で、キャベツは増加し、だいこんは減少が顕著となっている。だいこんは全年齢階層で減少し、はくさいは50歳以上の減少幅が大きい。

- ・東京都区部の小売価格は、だいこん、はくさい、レタス、キャベツについては、昨年夏の猛暑の影響を受けて、昨年10月から11月まで高騰したが、12月以降は落ち着いた。

- ・年齢階級別摂取量は、全世代で目標値の350gには達していない。20代、30代、40代の摂取量が少なく、特に、野菜の摂取量の少ない20代では年々減少している。

- ・家計での外食支出金額は、震災等の影響により減退していた。5月以降回復基調となっている。8月は天候不順により気温上昇がなかったことやイベント自粛等により前年比98%に減少した。外食店の売上高、利用客数も前年同月を下回った。

- ・11月から1月にかけての天気については、気温は、全国的に11月が高く、12から1月にかけては平年並みに推移する見込みであり、降水量は、全国的に概ね平年並みの見込みであるが、ラニーニャ現象が発生する可能性（その後発生が確認された）があり、その場合は東・西日本で気温低下の恐れもある。

(4) 23年産秋冬野菜の需要・消費の見通しに関する各委員からの意見

① 野菜全体の目下の消費動向

ア 景気、天候などの要因による消費動向

- ・景気が低迷しており、消費は減退傾向にある。
- ・今年の秋は例年より気温が高いため、きのこやはくさい等鍋食材の需要が弱く、逆にレタス、きゅうり、トマト等サラダ食材の需要が依然として順調である。

イ 震災、原発事故の影響による消費動向

- ・原発事故に伴う消費減退は、徐々に薄れてきている。
- ・ただし、きのこ等の新たな放射性物質の検出や、ホットスポットの報道がされると、関係する県の幅広い品目も敬遠される場合がある。特に、食の安全性への関心が高い学校給食や子供を持つ主婦から敬遠されることがある。

ウ 野菜全体の販売状況

- ・消費者が購入しやすい価格帯や量目を工夫し、いままで1個売りしていたものを1/2、1/4等カット売りをしたり、複数個の袋売りのものをバラ売りにしたり、大玉だけの品揃えから小玉等複数の規格をそろえるようにしている。
- ・直売所においては、野菜を加工して中食として提供する取組が盛んになってきている。
- ・消費者の多様な選択に対応するため、同一の品目について複数産地のものを併売している。また、選択できる利便性から、インターネットを利用した通信販売が活発になっている

② 秋冬野菜主要6品目の今後（11～3月）の見通し

ア 全体(主要6品目)の傾向

- ・一般家庭においては、キャベツ、はくさい、たまねぎ等で柔らかい品種のものが好まれる傾向となっている。一方、業務用のキャベツにおいては、寒玉系のようによく巻きのしまった歩留りの良いものが好まれる。
- ・冬場の野菜消費には、蒸し鍋による需要拡大が期待できる。

イ 冬キャベツ

- ・秋から冬にかけては、サラダ感覚で食べられる春系キャベツが主体となり、柔らかく消費者に好まれ、売りやすくなるので、需要の伸びに期待している。
- ・カット業者は、色味やボリューム感の関係から寒玉系を好む。

ウ たまねぎ

- ・今年の北海道産は小玉傾向で、業務用の大玉は不足することが想定され、円高も背景としてアメリカ産の大玉の利用が強まる見込み。
- ・家計消費では、1回に使い切れるM玉のニーズもあり、L玉のバラ売り、M玉の袋詰め等作柄に応じた売り方を行っていく必要がある。

エ 秋冬だいこん

- ・消費者ニーズに対応して、販売形態の多くが1/2カット売りとなっているが、そのことが販売量の減少につながっている。色々な食材との組み合わせで販売量を増やす方策を考える必要がある。

オ 冬にんじん

- ・主力になることはないが、逆に季節を問わず安定した売り上げがある。
- ・サラダ等の生食用やジュース用等、用途に適した品種で販売提案をしていくことも考えている。

カ 秋冬はくさい

- ・当面は関東産が中心になるが、消費者の選択肢を広げるため、引き続き複数産地を併売する予定である。
- ・はくさいは夏場の需要とのバランスを考慮した計画生産が必要と思われる。

キ 冬レタス

- ・レタスは、冬になると甘味が増してくるので、おいしい食材として提案していきたい。
- ・例年1月から2月にかけて不足する場面があり、業務筋では保険的な位置付けで外国産の手当てを行っている。

③ その他の販売活動の動き

- ・大学進学時や新社会人になる際の一人暮らし等、自炊を始めるタイミングに合わせて食育を行うことが重要である。

(5) 野菜需給・価格情報委員会への報告

(4) の意見を小林座長が取りまとめ、各委員に了承を得た上で、11月4日開催の第11回野菜需給・価格情報委員会に報告することとなった。